

居候へなど、上意にて、御相伴御料理出。例のこのしろ出候へば、佐州おし戴き、難有など、ひとり言の様に被申候故、佐渡は何故左様に申ぞと上意候へば、さればおまへの御存知の時分は、此このしろは末々の者も不被下物故、下直に御座候。今は殿の被召上候とて、事の外高直に成、中々我等舂の常に給らるゝものにて無御座候。今日御相伴故被下候。一段能き物珍敷奉存との御請なり。其後佐州御臺所の役人へ、何とまだこのしろは止まざるやと尋られ候へば、先日御料理に上可申哉と伺候へば、おけと上意也。不審なる事と申候へば、佐渡殿、左様に有べし。しはきお人ゆゑ、其心得をして先日申たゝと被申候由。

一、大阪城の堀幅

大阪の城を築候時、池田三左衛門・福嶋左衛門・加藤肥後守殿に被仰付候。初堀幅三間許有之候を、五間許にすべしと被仰付候て、江戸へ被成御座候。池田・福嶋申候は、しはき御人故普請の費を厭うて、五間許と仰付られたるものと云。肥後被申候は、いやゝ常は何と有ても、城普請などには費を厭給ふ御心にてはなし。何とぞ思召有べしと也。さ

れども池田・福嶋不聞入して、堀幅十間餘にする。其後御上洛にて上覽ありて沙汰の限なり。堀幅廣候て能事なれば、少も城普請などに厭ふ事なしとて御怒なれども、出来の跡ゆゑ不及是非候と云咄あれば、無用の事には御儉素に被成候事にや。此の城の事、小堀景直、夜話にありと可尋。

一、松平伊豆守の明察

天草落城ちかく成て、城外に四郎の姉のありけるに逢度とて、城内へ呼入此姉を呼入首尾は知不申候。對面しかへる時、饅頭二つくれてけり。姉を伊豆殿呼出し、城内の事を問。姉しかゝの事共を咄候て、歸時には土産に致せとて、饅頭を二つくれ申旨申候へば、伊豆殿聞て、扱々四郎は只ものにはなし。此姉に逢度とて呼しは、此饅頭をくれ、城内は兵糧乏しからざるゆゑ、加様の物をも取はやすと、我に此饅頭を見せんとの謀なりと被申候とぞ。

一、天野彌五右衛門天草陣の咄

天野彌五右衛門、初御使書、後御旗奉行。十六歳の時天草を勤候とて咄に、伊豆殿味方の討死の數を改められしに、藁を手一束に握らせて其數を改め、討死の者に一筋づゝさして通り、藁

幾つに切ゆゑ何ほど、數を知申候。是何よりはやく候よし。又城を惣乘にせし時の事なるに、有馬玄蕃頭殿陣前に竹垣あり、一人通る程有之所を、押わけゝしてかゝりけれども、その竹垣を引破りて一度に押出る事、誰も心付ものなし。少しの事も心づかぬものと咄被申候よし。

一、和田平三郎物頭勤むる仔細

水野出羽守忠周の家に、和田平三郎なる者世々物頭を勤む。其仔細は水野殿先祖出陣の時、或人姓名不知敵と鍵組み終に討勝て首を獲たり。其所へ又一敵來ていふやうは、扱々御手柄被成候。其ものは名ある者に候。首を御見せ候へ、名をしらせ可申と申候故、則首を見せければ見るふりにもてなし、其ま、提て行。首を得たるもの追んとすれば、戦に疲れて追ふ事叶はず、茫然として居たり。然處へ又一敵來り、鍵を合せんとする。其時彼者何とぞ奮發したりけむ、立あがり鍵を合せ、敵は馬上其身は歩立、彼此挑むうち仕合やよかりけん、終に馬上のものを鍵付突落し、無難又首を揚たり。然る内又一騎武者來て云は、先程よりの御働見請感入候。先に首を御ぬすまれなされしに、又首を獲給ふ

事無比類候。我は和田平三郎と申浪人にて候。敵方にもなく、又味方にもなく、波瀾の入りひがひなき者には候へども、先刻の證人には私可罷成候間、我等が名をば書留被成候へ。御尋も候はゞ何方にてもめぐり可逢といふ。何某答て曰。如仰先には首をぬすまれ、無是非事と存候處へ、士冥加不盡して又首を得申候。先刻よりの證人には立可被下候由、思召の程忝存候とて、跡に取たる首を持既に乗出むとしければ、和田曰。首を御取武功はすぐれ候へども、軍禮は御存知なきと見えたり。大事の物を御落し候。さいはいは武者を討ては添へ申法に候。采幣は常の武士はかけざるものに候。其様子にては、首實驗に被入様も御存知なきと存候。か様ゝに被成候へと教る事懇也。何某彌禮謝して、扱本陣へ行き采幣を添へて、習ひし如く披露す。是を水野殿見て、やあれ己首を得まじきものとは思はず。されども常に軍法を講ずる事も不聞に、只今の首披露、首尾いたしたる事不審也とあり。前よりの首尾働等、和田が證人に可立といひし事、首實驗に入れやう教へし事共、一々申上候へば水野殿、和田が頼もしき心底を感じ、ゆかしき和田かな。何とぞ其ものつれ